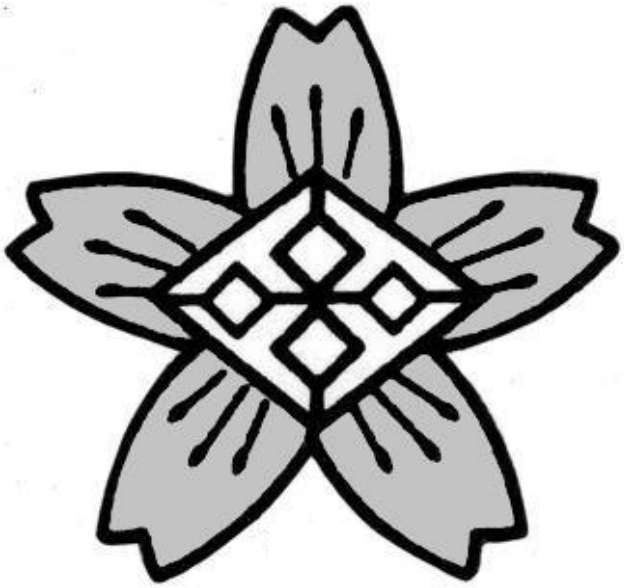
私の板四、私の板橋

《昭和 10 年代から昭和 30 年代の記憶から》



板橋第四小学校同窓会

平成 30 年 4 月発刊

まえがき

ある時代の断片的な記録や短い感想でも、それが数多く集まれば、その時代の空気が読めるようになるのではないだろうか。その思いから、板四小での学校生活や板橋の街並みについての記録や感想を、四年前から会員に呼び掛けてまいりました。

昭和十年代から三十年代のものが一定数集まりましたので、過去に同窓会だよりに記載されたもの、さらに同窓会二十年の記録も合わせ、母校創立九十周年記念事業の一環として小冊子にいたしました。

書かれた時期がここ数年にわたるため、平成三十年からは必ずしも時間的にそぐわない箇所もあることをお含みおきいただければと存じます。

もくじ

学校生活・・・・・・・・・・・・・・・3頁

地域の街並みや遊び・・・・・・・・・21頁

疎　開・・・・・・・・・・・・・・・38頁

同窓会20年の歩み・・・・・・・・・50頁

学校生活

三保谷八重子（昭和十七年卒）

六年生の女子数名、先生方の会合の受付、案内役。あとでそっと体育館を覗きましたら、黒長ドレスの女性の方が壇上で演説しておられました。木内キヤウ先生。戦前女性校長の第一号でいらっしゃいました。（あとでわかりました。）

杉浦　芳子〈旧姓平井〉（昭和十七年卒）

11号の「同窓会だより」の「我が家は三代、板四生」の三保谷八重子さんとは同級生でした。学芸会と六年生の日記の写真、懐かしく拝見いたしました。低学年の頃、板橋区リレーの代表チームを送り出す応援に校庭へ集まり応援団のうたを歌ったことがありました。

「花は桜木　人は武士、
桜の標（しるし）を戴（いただ）ける
板橋第四の我が選手こそ
花とその香を争そわめ」と
覚えていますか？

須藤はな子（旧姓高橋）（昭和十七年卒）

私にとって小学生時代が一番懐かしく忘れられない時代だったと思います。一年から六年まで男女組で組替えもなく（ダンジョグミと云われるのが当時嫌だった）お転婆だった私は男の子の様な生活をしていました。勉強などはそっちのけ、学校から帰れば家にカ

バンを投げ出し遊びに遊んだものでした。

校庭は上と下に分れ、上の運動場には御真影がまつられており、体育などは主に下の運動場でした。学校の前にはパン屋があり家の都合で弁当を作れなかった時は朝、親からお金をもらってパン屋に飛んでいったものでした。食パン2枚の間にヘラでジャムを塗ってもらい教室で食べた事が忘れられません。そのパンのおいしかった事、その味が忘れられず、今だにそれが尾をひき、食パンと云えばイチゴジャムを食べています。あの当時、学校前であったがパン屋さんに行けたんですよ。

鈴木雪子（昭和十八年卒）

板四小には昭和12年入学、校舎は木造二階建て、校庭のレベルも上下に分れていました。小五の時太平洋戦争が始まり次第に激しくなってきましたが、小学校最後の関西旅行の機会が与えられ、伊勢、京都、奈良を回ることが出来ました。東京空襲で下板橋も大分やられ、私も家を焼かれて板四の校庭に避難しました。逃げる地面が熱かったのを今でも思い出します。

国道17号線も日比谷からの市電終点近くには、お不動さんや芝居小屋も有りました。板橋駅の近くには川が流れ赤土山と呼ばれた広い草原があり、よく草野球をしているのを見ました。今のJR板橋駅から板四小への通路は何処を歩いても本当になつかしい道々で思い出一杯です。

◎毎年一回開催される学芸会はとても楽しみで五年生の時、１組から４組まで一人ずつ自分の作った詩を読み上げ、とても好評でした。

私も４組から代表で自作の詩を披露しました。当時、講堂の壇の向きは現在と反対側の位置にあり、校庭は上下に分れて下のグランドは主に運動のために使われていました。全校体操などの折は、レコード（音楽）を校庭に向かって流していました。私はその重要な音楽のお役目を与えられ、大変な責任を持ってその務めを果たしていたことを今でもハッキリと思い出します。

太平洋戦争が次第に激しくなって来て楽しい体操の音楽もいつか分列行進の形に変わっていってしまったのです。この変化を身を以って体験してきた私は心から平和な世の中を願わずにはいられません。

岡　恵美子（昭和二十年卒）

板四小の地鎮祭の写真のように思いますので見て頂きたいと思います。私の父岡勘三郎が左側、森照さんが右側に、中央が校長先生のように思います。学校に寄贈します。

昭和 21 年 8 月　板橋第四小学校地鎮祭

龍田幹雄（昭和二十年卒）

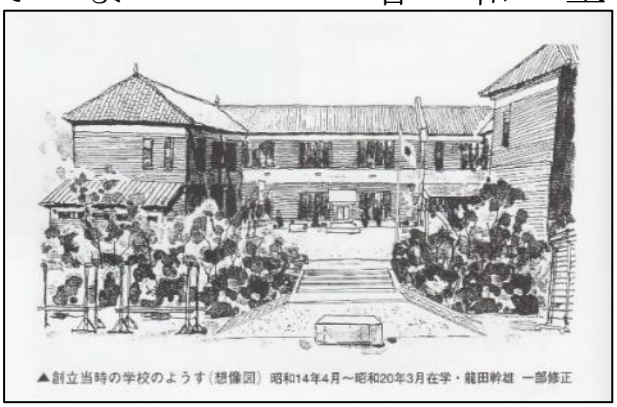
昭和14年４月に板橋第四小学校に入学しました。校舎は木造二階建てでした。この校舎は当時、東京

市が関東大震災の後に「復興小学校」の名目で下町の木造小学校を耐震耐火構造の鉄筋コンクリートの三～四階建校舎に建て替えた折、港区の白金小学校の木造校舎を移築したものとのことです。この校舎は一寸変わった構造で音楽室や工作室が一般教室と離れて独立しており、トイレが二ヵ所共、校舎から離れた屋根付きの渡り廊下でつながっておりました。

校庭は小さい上の校庭と広い下の校庭に別れていて、講堂（体育館）は下の校庭にあり、上の校舎とは屋根付きコンクリート床の渡り廊下でつながっておりました。上の校庭から下の校庭に行くのは石段を真っすぐ降り、途中から左右に別れて降りて行くようになっていました。

戦時中、生徒の数が増え教室が足らなくなったので、昭和18年４月に下の校庭に上下各四教室の新校舎が完成し、五、六年生が入る事になりました。私達新五年生は二階に入りました。当時は一学年四クラスで朝礼の時は下の校庭が一杯になったものです。

昭和19年８月になると、米軍の空襲から学童を守る為、学校ごとの学童疎開が始まり四～六年生は群馬の沼田へ、三年生は同じく群馬の上牧と川場へ疎開しました。一～二年生は残留でした。私共六年生は中学校や女学校へ進学の為、昭和20年３月始めに帰京し、月末の卒業式に出席しました。５月の



▲創立当時の学校のようす（想像図）昭和14年4月～昭和20年3月在学・龍田幹雄 一部修正

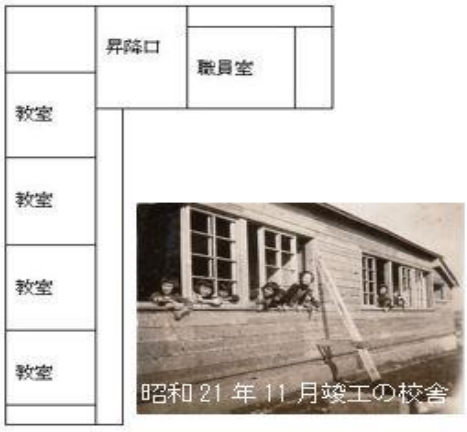
空襲で校舎が全焼しましたので私達が旧校舎での最後の卒業生となりました。色々と思い出の多い旧校舎でした。

尚、旧講堂にあったピアノは戦災を免れ現在郷土資料館に保管されており対面する事が出来ます。

岸　孝夫（昭和二十二年卒）

昭和二十年十月に疎開学童が帰京してからは、隣の北園高校（当時は都立九中）の校舎を借用することになりました。音楽教室、生物教室などの特別教室の他に、講堂下の図書館を仕切ったりして新しくいくつかの教室が作られましたが、ベニヤ板を重ねただけの粗末な仕切りのため、隣りの教室の様子が聞こえてくるような状態でした。それでも教室が十分確保されていないため、午前だけ午後だけの二部授業や焼跡での青空教室などでのやり繰りの授業でした。集会や体育の授業は板四小の校庭で行われるので、往来をしやすくするため、北園高校との境の壁の一部分が壊されたことも想い出されます。

翌昭和二十一年十一月待望の復興校舎（左図）が現在の校門付近に落成しました。わずか四教室しかなく、廊下はコンクリートの三和土にすのこを敷いただけのものでしたが、自分たちの校舎で学べる安心感は忘れることが出来ません。教室の不足は解消されたわけではなく、依然として二部



授業は行われ、児童数の増加に伴い、旧第二造兵廠内の施設を活用した分教場（現金澤小学校）の開設へとつながりました。

山元　英美〈旧姓伊藤〉（昭和二十二年卒）

板橋…やはり、なつかしいです。木造作りの校舎、そして板張りの廊下などなど、給食の後の肝油配り、そして集団疎開。あれも、これも遠い昔となりました…と言えますことの、今を感謝して日々を迎えております。

松崎　富子〈旧姓大島〉（昭和二十二年卒）

集団疎開から戻って来たら校舎は上の校庭、下の校庭全て焼けていて、焼け跡の瓦礫の片づけなどが授業時間に行われました。となりの九中の窓硝子も割れていて教室は九中の音楽室だったり、柔・剣道場で、椅子があったか否かは思いだせません。

宮坂　恒治（昭和二十二年卒）

戦中の疎開のため、三年までしか在籍出来ませんでした。戦地への慰問品として、代表して絵をかかされましたが、空中戦の絵で、日本軍機も撃墜されているのがよくないと書き直しさせられたのが記憶にあります。

鈴木　良治（昭和二十三年卒）

当校二学年にて転校、縁故疎開にて五年二学期まで埼玉県秩父方面に疎開、当校へ戻り、卒業。想い出多い頃、山奥の学校へ転校のため当校の

想い出はあまりはっきりしません。小学校一年入学の折、大変きびしくても、大きな想い出の先生の一人紀陸先生の事は良く覚えております。校庭に入ると奉安殿と二宮金次郎像を想い出します。

紀陸先生の授業前の唱和　※雨垂れ石を穿(うが)つ、石の上にも三年。

鳥山　正博（昭和二十三年卒）

卒業時の紀陸武次先生の「無形の贈りもの」は忘れ得ない思い出です。アイキッズで子供と将棋をたのしんでいます。

津野　順子〈旧姓山路〉（昭和二十三年卒）

終戦後５年生の時に板四小に転校して来て、子供なりに自分の考えをはっきり発言しても良いんだと確信した事をおぼえています。給食もコッペパンと脱脂粉乳でしたがとてもおいしいと思い、くらいついて食べました。紀陸先生には毎日何か「名文」を読んでいただき勉強しました。

伊藤　とし子（旧姓常田）（昭和二十三年卒）

遥か前の事で想い出すのも苦労！！勝ち目のない戦争の犠牲になり学校も家も食べ物も無く、池袋（豊島区）より６年生時、板橋第四小へ転入しました。初めて声を掛けてくれた同組の女性丸顔の岩城さん？という人でした。転校生でもイジメなど無く仲良く遊んでくれ短い期間でしたが楽しく過ごせました。

給食（飲み物）の脱脂粉乳、今のスキンミルクですけれど味が違い、スコブル悪い味で飲むと気分悪くなるので飲みませんでした。その事を家に帰って父親に話したら「お父さん飲んであげるからー」というので持ち帰って飲んでもらったら美味しい！！って飲んでいました。救済用ララ物資なのですねー。

佐藤浩史（昭和二十四年卒）

東京府立山谷国民学校一年時に縁故疎開で神奈川県山北町清水小学校に転学し終戦を迎える。同校より板橋区立第四小学校に転入学する。三年次の担任は長谷川先生、四年次は丸山先生に指導を受ける。

東京に帰る途次、列車の車窓から目にする横浜、東京の光景は空襲により都市の様相は見る影もなく一変していた。板四小学校も焼失し青空教室を体験する。戦中、戦後と焼け野原の中で生活、混乱期の中で生活を強いられた幼年、児童期で目にした光景など鮮明に記憶にとどまっている。

今野輝子（旧姓上林）（昭和二十四年卒）

校庭が二段になり、真ん中に階段が有り上の校庭に奉安殿と二宮金次郎の銅像が有り、朝必ずその前で頭を下げて校舎に入って行った記憶が有ります。お弁当は各自ごはんを詰めた日の丸弁当で、先生がふりかけをかけてくれて、いただきますと手を合わせて、食べたことを思い出します。

今の情勢の中でどうかいつまでも幸せな時代が続いて下さるよう願う一人です。

田中　清（昭和二十四年卒）

昭和22年1月疎開先から板橋一丁目に越して来ました。戦火の焼け野原で家も少なく国道17号線を走る都電を実家の店先から見渡すことも出来ました。

当時は北園高に間借りしての教室で、破れた窓ガラスは板で塞いでの授業でした。そんな中でも大変ありがたかったのは脱脂粉乳とコッペパン等が主の給食でした。懐かしく思い返されます。学校を出たところの国道17号には18番志村坂上発―神保町行の都電も通っていました。

中澤雅夫（昭和二十四年卒）

私は軍国主義国家の大日本帝国少国民として入学、民主主義国家の平和日本国民として卒業しました。昭和18年入学、一年一組（青組）、担任石塚先生、二年大西先生（女性教師、石塚先生は出征？）、三年～四年丸山弘雄先生、五～六年渡辺芳子先生でした。どの先生も真剣でした。

石塚先生の「海豚二等兵物語」は大喰らいの二等兵が海を潜って行って大戦果を挙げる話。二年は九九と肝油（丸い粒）、三年は、板橋で夜の探照灯と昼の空中戦、疎開先でグラマンの機銃掃射。

夏休みに帰ってきた時終戦。8月15日、急にシーンとなりました。あのサイレンも爆音もなくなりました。板四小の校舎はコンクリートの土台と防火壁だけ、講堂はグニャグニャの鉄骨、校庭は大きな穴ぼこだらけ、防火用水プールは瓦礫で埋まっていま

した。

９月、青空教室。その後、ジャガイモ、サツマイモ作り、縄跳び、馬跳び、野球をするようになりましたが、卒業記念写真を見ると軍服姿が残っています。今年は平成24年、卒業したのは昭和24年でした。

岡　博美（昭和二十五年卒）

昭和五年（１９３０）結婚した両親が当時市電終点と言われていた頃から現在地に住み、姉、弟二人、妹二人、息子三人、孫二人が当校で学びました。

私は昭和十九年第四国民学校に入学しましたが、戦況が厳しくなり、国の命令で学校病院等を除き、木造家屋を自費で壊し片付けて退去せよという強制疎開の為、区内の片田舎、土支田（戦後練馬区）に転居、二年の時は都内の学校には通えず、埼玉県の白子小学校に片道四、五十分歩いて通い、戦争が終わり、近くの豊渓小学校に転校し、翌年元の住居に戻ると我が家の質蔵だけが残り、付近一帯が朝鮮の人に払い下げられ、十年以上、地代を払わされました。

四年生で本校に戻れ、担任は女性の福岡先生、五・六年は天田先生で、六年生のとき木造二階建ての校舎に移り三組が四組に増えました。

今でも六年生は、日光に行きますが、戦後四年しか経たず、食べ物等色々な物が不足しているときに、私たち各自が貴重な一合のお米を持って、日光へ一泊旅行しました。当時はほとんどお湯に近いもの、または芋の茎や大根の葉を刻んだオジヤに混ぜた

お米で数人の家族が分け合って食べた貴重なお米だったのです。

平成二十五年、久しぶりに恩師天田先生を囲んでクラス会を開き、初参加の女性が「あの方どなた？」と聞く位しゃんとされ、「あの頃、あなたは」等と各々の記憶が確かな思い出話で、もりあがりました。

余談ですが、父もお願いに上った大正・昭和の大詩人西条八十先生が本校を訪れ、作って頂いた校歌の、第四小学生とあるのを古関祐而先生が楽譜にダイシと書かれ、今も唄われているのが、残念です。

平成三十年は、本校九十周年、わが同窓会も学校の協力と諸先輩はじめ多くの皆様のお陰で二十周年を迎えることができます。

総会に参加されない方、遠方の方、ご病気療養されている方などからも、毎年ご厚志を頂いているからこそ、二十年も続けることが出来たと、有難く感謝申し上げます。

姉崎　裕子〈旧姓佐藤〉（昭和二十五年卒）

元気な女の子だったと思います。鉄棒から落ち、男の同級生３・４人に交替でおぶってもらい家迄送ってもらったのは今だに忘れられません。その時お世話になった方々有難うございます。

藤田　彬（昭和二十六年卒）

板四国民学校に入ったのは、昭和二十年の暮れ、疎開していた新潟から帰京し、母の実家があった王子を経て板橋に引っ越して来た時でした。

父に連れられて訪れた板四は何と、黒と灰色の迷彩色を施した巨大な城の様な建物で、これが学校だと教えられたのには唖然としました。当時の旧制第九中学、今の北園高校だったのです。板四の建物は空襲で焼けて全く無く、僅かに一階と二階がつながった防火扉がヒョロヒョロと倒れそうに残っていました。父親に入口を尋ねたところ、入っていったのは四小と九中を隔てた石の塀の一部を壊して無理矢理空けた隙間でした。

入るとすぐに眼の前に九中の大きな二階建ての図書館があり、そこを隈なくベニヤで仕切って教室を作っていたのがこの時の板四でした。ガラスは空襲の爆風で割れた分が沢山残っており、暖房は教室にある火鉢が一つだけで、ストーブが入っていたのは職員室だけでした。中庭に出ると建物の裏側に巨大な戦車の壁画が学生の手によって描かれており、戦時中の面影が濃厚に残っていました。

教室の数がとても足らないので二部授業が多く、雨が降った時は生徒達は足を抱えて廊下でじっと待っていました。反面、焼夷弾で破損したタイルが積まれた屋上は格好の青空教室となり、天気の良い日は富士山筑波山を眺めながら授業を受けました。

十年後に北園高校の生徒となって昔の建物に帰って来た時、板四小の子供達の元気な声を聞き、稀有な経験をしたものだと思いました。

◎★昭和21年疎開先から帰京し、板橋第四国民学校に中途入学、但し校舎は丸焼けで隣の九中（現北園高

校）のお城の様な校舎で授業を受けました。田原先生、原田先生、渡辺先生といった名前を憶えています。（2部授業、3部授業、屋上での青空教室あり）

★本来の敷地に新校舎が出来はじめ、生活も安定、でも教科書黒塗り事件あり、臨時給食（進駐軍の鮭の缶詰の放出品）を先生がバケツに入れて、一人一人のドンブリに配ってくれたのが猛烈に美味しかった。

★三・四年生の頃、学校の前からバスで三浦半島に遠足に行った。夢の様に楽しかった。

★五年生の時、湯川博士のノーベル賞受賞にクラス全員で万歳三唱をした。先生も興奮していた。

★後年北園高校に入学して昔の事を想い出した時は感無量。

★六年生位の時、都の他の小学校と合同で、月島桟橋から東海汽船橘丸で館山まで臨海学校に行ったのも楽しかった。船中、小松崎茂さんが舞台で劇画を描いてくれた。

金井　暎子（旧姓藤島）（昭和二十七年卒）

私は終戦の次の年、昭和21年に入学しましたが本当に大変だったと思います。

今でも忘れられないのは、まだ私達は小さな子供で、もっと小さな妹をつれて登校した方もいましたが、先生も大変な時は分っているので良く面倒をみてくれたのを思いだします。

須藤　昌美（昭和二十七年卒）

今では想像も出来ませんが、授業が2部制（教室不足か？生徒数が多かった？）。体罰（授業中のペナルティー）はイガグリ頭にソロバン玉でグリ

グリやられた事（痛い！！ 今でも痛かった事を想いだします）。

小竹孝雄（昭和二十七年卒）

親子三代目が今春、第四小に入学しました。私の時代は教室が足りなくて二部授業や北園高校を借りて授業しました。給食は四年生位から始まって、コッペパン一つと脱脂粉乳でした。今では考えられない時代です。因みに一年生の孫は給食をお代わりしているそうです。（おいしいとの事）

治久丸京子（昭和二十八年卒）

五年生の時だったと思います。金沢小学校が出来、親しかった友が多く転校して行ってしまい、しばらく淋しく過ごしました。六年生になり初めて学芸会で練習を重ね、他の級の人達と一緒の舞台で楽しかった事を良く覚えて居ます。

柴田敦子（旧姓菊池）（昭和二十九年卒）

昭和23年の入学です。24年に上京して板四小へ転入、生徒数が多く、たしか三～四年生だったと思いますが、二部授業をしたことがありました。午前の授業を終えたら下校、交代に午後の組が登校しました。給食は午後の組が食べたように思います。

四年生の時、金沢小学校ができて半数が分かれて行きました。中学生になって板一中でまた一緒になったのですが、一年の途中で板五中が出来てまた分れました。ベビーブームで子供が増え、次々と学校

が建てられた時代だったのでしょう。

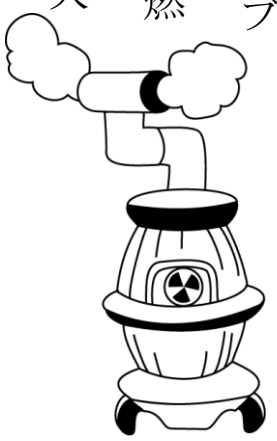
◎敗戦から４年、上京して落ち着いた先が板橋でした。板四小の二年四組にはとてもきれいな洋服を着たお嬢さんらしき人がいました。四年か五年の時転校してしまったのですが、後で知ったところによると板橋に疎開していたとのことでした。どうりで当時、遊びに行った時の家のたたずまいといい、家具調度などびっくりするものばかりでした。別荘だったそうです。

福田　光子〈旧姓石川〉（昭和二十九年卒）

一・二年生の頃だったでしょうか、生徒数が多く二部授業でした。ある日、早めに家を出て教室の前に行くと音楽の時間で歌声が聞こえます。どうやら、この日は本当は午前の授業の日なのにまちがえてしまったようです。恥ずかしくて中に入れなくて、廊下で泣き出してしまいました。しばらくして、思い切って泣きながら中に入り泣きながら歌を歌いました。その後はまちがわないように気をつけました。

本間　貞夫（昭和三十一年卒）

三年生の秋に板四小に転校、在学した昭和３０年を含む前後３年余りの時代には、校庭に大きな防火用水？（プールではなかった）。登り棒（竹の太さが印象に残っている）、回旋塔が運動場（校庭）にありました。冬にはダルマストーブが暖房で石炭やコークスが燃料でした。当番制で専用の大



きなバケツで置場から教室へ運びました。

隣の北園高校の窓ガラスの多くが割れているのも印象深く残っています。私達が朝礼の時、屋上から見下ろしている高校生を見て、高校生は暇でいいなと思ったものです。それが母校となりましたが不純な入学動機でした。

新田美奈子（旧姓秋山）（昭和三十一年卒）

★兄弟４人が板四小卒です。皆元気に暮らしております。

★長兄の時は、校庭が上下に別れていました。私の時はタイラになっていたように思います。

★給食に出たミルク……。飲むのが苦手でした。

★音楽の田村ハル先生のおかげで、今も「歌が大好き」になり、アカペラコーラスで歌っております。

安藤　利亮（昭和三十三年卒）

入学時（昭和２７年４月）は、教室に電灯もない応急校舎があり、雨や曇りの暗い日は黒板の文字が読み難く苦労しました。プールはなく、校庭が上、下２段に分かれていました。給食の脱脂粉乳のまずかったこと、でも月に一度位「あげパン」の日はうれしかった。

落合　唱幸（昭和三十四年卒）

入学しばらくして校舎建て直しで２部授業、給食のミルクがまずかったこと、完全給食でなかったので弁当持参だったり、校外へ出ての買い食い自由だったことなど、妙な小学校だったと覚えています。

一度校庭にヘリコプターが降りて来たことがありましたが「あれは何だったのでしょう」

中嶋　美恵子（旧姓坂井）（昭和三十六年卒）

在校時の唯一の想いでとして浮かぶことは、低学年では、木造校舎でしたが、鉄筋コンクリート造りの新しい校舎（確か高学年）に入れるのが楽しみでした。

加藤典子（旧姓上田）（昭和三十七年卒）

★私たちの頃は、1クラス50人を超え、新校舎建設のときは早番（朝から授業）、遅番（午後から授業）の二部制でした。

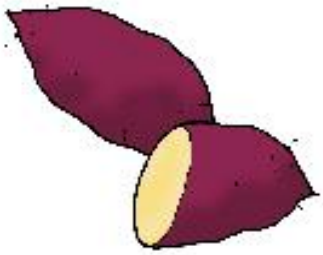
★この新校舎に初めて水洗トイレがつきました。それまでは『4・9　36』『4・10クサイ』と呼んだボットン便所でした。

★廊下には下校時、防火用水を入れたバケツを出し、朝、日直が教室内に入れ、それで掃除の時、毎日雑巾がけをしました。皆が縦にならんで、同じ所を列になって拭くのだからとても綺麗に掃除していたのではと思います。ハタキも有りました！

木内　徹（昭和三十七年卒）

私は戦後ベビーブームの子供いわゆる団塊の世代である。六年生時のクラスは4つあり、クラス平均50名以上と言う、大量の生徒で溢れていた。木造校舎が足りず、午前と午後の授業分けで急場をしのいだりしていたが六年生時には鉄筋コンクリートの新校舎で授業を受けるという恩恵にもあづかった。

その新校舎時代の思い出はなんといっても焼き芋だ。西日が差す暑い教室であったが道路に面していた為、外を通る人々や物売りを見るのが楽しみではあった。ある日、そこを屋台を引いた焼き芋屋さんが通り、誰言うとなく焼き芋を食べたいという気持ちがクラスに充満した。その時、担任であった宮永先生が「木内焼き芋買って来い」といわれクラス全員で食べた事が今でも強烈な思い出として残っている。



私は今でも年に1～2度、以前住んでいた所を中心にゆっくり時間をかけて歩いてみるのだが、いつもの遊び場であった路地裏は区画整理事業で一帯が工事用フェンスで囲まれていた。一時は小さな飲食店が多くあり賑わっていたがもうその面影はない。子供の頃、節分で豆まきが行われていた観明寺も当時とっても大きな寺という印象があったが、今行って見るとこんなに小さかったのかと驚く程である。あと2年で還暦を迎える年になったが、子供の頃の思い出は年と共に鮮明になって来る今日此の頃である。

林　真治（昭和三十九年卒）

一・二年生の担任だった岡崎先生、三年生は安部先生、四年生の時の太田先生、五・六年生の時は鈴木宏先生、音楽の田村先生。今考えると皆さん本当に優しく、教育に対する情熱がほとばしり出るような先生ばかりだったと思います。

6年間の中でも大事件だったのは、四年生の3学期に太田先生が病気療養のため、私たちのクラスが分散して他のクラスに編入されたことです。当時はクラスの違いで付き合う友人も大きく変わりましたので大変不安に思いましたが、すぐに新しい友人ができ、うちとけられたことを思い出します。

一番の思い出は、今でも私の人生のテーマとなっている「思いやり」の精神です。これは六年時の担任だった鈴木宏先生が卒業記念の寄せ書きの中央に書いてくださったもので、今でも私の生きる指針となっています。

地域の街並みや遊び

森田哲夫（昭和十年卒）

私が本校に入学した頃です。中仙道の旧道は下町から「しもごえ桶」を積んだ牛車が朝夕列をなしてギシギシと通っていました。駅前の八千代銀行の場所は元はバスの車庫でした。「東都乗合自動車」（現国際興業バス）の発着所であり、練馬や志村に住む人達にとって重要な足場だったのです。

「改正道路」と私達は呼んでいた新道が出来、路面電車が巣鴨から平尾の交番の所まで伸びてきて、いつか中仙道は「17号線」と呼ばれるようになりました。都営地下鉄三田線が「赤羽線」（埼京線に出世し

ました）の下をくぐり抜け、高速道路の巨大な脚柱が建ち並び、校歌にある三五の原やガスタンクの風物、面影は全くなくなって、板四小の周辺はすっかり変わってしまいました。

飯塚　陽价（昭和十五年卒）

年のたつのも速く、今年で88歳となり、世間では米寿と云って、おめでたい方のことですが、現在の私には、少しも喜ばしい気持ちではありません。と云いますのも己の誕生日を病院で3回も迎えることになりました。板橋は本当に懐かしい所でありますが、昔の友人も多く他界されてしまい残念に思って居ります。金沢橋のソバで製材をやって居ました吉田、お風呂屋さんだった下野君も今なしとのこと。

三保谷　八重子（昭和十七年卒）

いつの間にか、日本の女性の平均年齢に達しておりました。私などはまだ小僧っ子で、先輩が多勢おられるんですね。これからも自立生活をと、願っております。

平尾交番の脇17号線上（地下鉄の上）に、市電の停留場があり（始発）日比谷まで通じていて、そこを横切って通学するので楽に渡れました。その道わきを、朝早く大八車に肥料桶を運ぶ男の人、少し遠くの病院へは人力車に乗せられたりのどかでした。昭和8年～12年ぐらい。

◎★昭和11年入学、卒業まで学級編成替え無し、他学年は4学級あるのに私達は3学級、2組は男女

組、卒業アルバムを見るとどこも60人以上でした。

★校地の真ん中あたりに大段差があり、全校集会、運動会は低い方で行うので、狭かったですね。

★高学年「修身」学科の一つ（昭和8年頃か）東北地方の地震、津波で犠牲者が出たこと、「沈着冷静に急いで高い所へ逃げる」という事、海に遠い子供でも学習しておりました。

★昭和11年入学した頃は、板四小、府立九中（現北園高）北側段差ひどい低地で家はありませんでした。昭和13年頃から分譲地になり、家が建ちだし友達も少し転入学してきました。府立九中の少し先まで、まだまだ広い“三五の原”寂しい野原、板谷公園なども子供だけでは行かないように注意されていました。

★板橋駅西側、今のマルエツ、マンション群のあたり、周囲より小高く「赤土山」と呼んでいた野原、雨後はぬかったりしましたが、四葉のクローバ探しをしました。遠くまで良く見通せました。

★赤羽線（現埼京線）電車も通りましたが、貨物列車十何両編成でよく通過したり、線路数の多い所では、手旗信号で合図して操作をしていました。踏切には、踏切番小屋があり、おじさんが遮断機の上下をしていました。

★女子は裏路地でロウ石で石けりをしたり、何人もで縄跳びをして遊んだり、時には細い路地まで利用

してかくれんぼもしたりしました。

杉浦　芳子（旧姓平井）（昭和十七年卒）

昭和10年代、板橋駅の近くから通学していました。市電通り、旧中山道、水道通り、駅前通りの４本の道路を横切って毎日楽しく学校へ行っていました。

今でも、陶山写真館（三階建）、大都座、大田呉服店、平田銅壺（どうこ）店、佐伯医院、福田牧場、お稲荷さん、嶋田薬局、八百屋さんと運送店を曲がってやっと谷端川と赤土山が見えました。子どもの足で10～15分かけて町並みを見ながら楽しく通学しました。目に浮かぶ風景です。

（帰り道の風景です）

乙川　昭三（昭和十七年卒）

私は昭和17年（1942年）３月、戦争が始まって４ヶ月後、板橋第四国民学校（前年４月国民学校令により小学校が国民学校と改組）を卒業しました。当時、小学校から大通りに出た所に東洋パン（おしゃれなパン屋）、岩朝食堂、びっくり饅頭等があり、向かい側には板橋市場、そこに市電終点がありました。又、府立九中（北園高校）の裏には三五の原と称する広い野原があり、夏はトンボやセミ取りで賑わいました。

70数年前の風景が懐かしく思い出されます。私は板橋生まれで、戦後板橋区から分離独立した練馬区に居住しており板橋は我が故郷です。

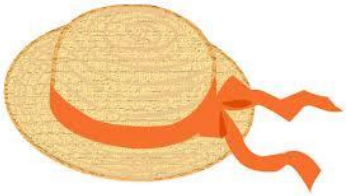
昭和20年４月に自宅が戦災で焼失した時に板四

校舎に避難しましたが、その後校舎を焼失しました。思い出です。

山本照子〈旧姓榎本〉（昭和十七年卒）

当時の校舎は上の運動場と下の運動場とあり、講堂は上の校舎よりスロープの廊下を降りてきた事が懐かしく思いだされます。又、板橋の本通り商店街、子供の頃母に連れられ、キクヤ洋品店で帽子等買って貰った事、大田屋呉服店等本当に懐かしいです。

5、6年生ごろの思い出はお昼のお弁当はお金を貰って東洋パンに行って半斤のパンにジャムをぬって美味しく頂いたのが何より嬉しかったです。



石田イソ子〈旧姓松原〉（昭和十七年卒）

想い出はたくさんあっても走馬燈のように回り、今年86歳になり元気です。

三五の原のすそ野の広がりを玄関前で一人ぽつんと眺めている就学前の私、後、学校には一、二分の電車通りに移り住んだ時には、池上本門寺から繰り出されたお会式のお万燈の灯の明かりと若衆の勇姿と、中仙道を往来する牛馬の人足達の休息の夕イコ焼屋さんがすぐ近くにあってのどかでした。（野原の多い、糸トンボ取ったり。昭和激動で大変な時期でしたが、兄は赤土山で大ヤンマを追って）

大吉　章喜（昭和十九年卒）

板四を南へ１００ｍ程行くと大通りにぶつかり、

そこが東京市電（路面電車）の終点「下板橋」でした。板四小を卒業した私は、この電車で１時間、神田にある工業学校に入学しました。路面電車が志村まで延長され、やがて路面電車が廃止されて、地下鉄に取って代わったのは、それからずっとあとのことで。

◎学校の正門前にパン屋さんがあって、午前の授業が終わると走って行って列に並び、一人一個限定のパンを買いました。時々、自分のすぐ前で『ここで売れ切れー』がありました。すこしはなれた電車通りには東洋パンという大きなお店がありましたが、早くから大人の人が長蛇の列で、生徒は殆ど買えませんでした。その１年後、日本は戦争に負けました。

◎私の板四小時代、その昔あった「板橋宿」は人々の生活を支えていました。その一軒で東光寺入り口近くの店で「ビックリ饅頭」を午後時々売るということで、私はその日の母の買い物した重い袋を全部持つという条件でお金を貰い列に並んで、運よく買えた時は、そのマンジュウをそのままそこでよく立ち喰いしたものでした。戦争が日々厳しくなり、食べ物が一層乏しくなっていった頃のことです。

石井　完（昭和十九年卒）

当時、私は６丁目に住んでいました。近所に同級生の新井君の家が有りスポーツ店でした。又、スヤマと云う写真館も有りました。市電が走って居ました。一年生の時にその電車に乗って小石川

の植物園に行って来ました。その時の写真を今も持っております。そこで始めて「白人」の子どもをみました。昭和19年2月に母の故郷の宮城県に転校しました。

高橋　英之（昭和二十年卒）

昭和20年4月13日、空襲時はランドセル一つで一人火の中を逃げ回って居た。焼け跡に戻って来たら姉が先にいて、前夜のお釜の中の米が御飯になっていておにぎりを作ってた。水は出っぱなしで見渡す限り焼け何もなし。川越街道のコンクリートの池袋警察以外なし。

塩野　俊夫（昭和二十一年卒）

板四の思い出、登校、下校での事、三五の原で一面の長い草を結び人が転ぶのを見る……そんな悪戯をした。今でもありありと思い出します。又、下校時に下水に落ちていたハーモニカです、箱入りでした。拾って帰り、父が熱湯で消毒してくれて吹いた事、70年以上経ったいまでもたまには吹いています。

嶋田　功（昭和二十二年卒）

★赤土山

戦前、戦後（数年）は大相撲の巡業があったり、グライダーが飛ぶ大きな原っぱで、商店街には本場所前、触れ太鼓が響いた。大都映画のロケも時々やって居りました。（今はスーパー・マルエツ等々）

★現在の八千代銀行は、戸田橋方面へのバスの車庫。

ユニクロは、大都座映画館、駅前公園は牧場でした。又、代々木から出発した御召列車が板橋駅を通過しました。

★旧中仙道には、江戸に入る最後の旅館が何軒か並び、現在の「生協」は丸通こと日本通運であった。現在の加賀周辺が造兵廠で、軍事物資を運ぶダルマ電車が走っていました。板橋駅東口に近藤勇の墓地、処刑前豊田家で身柄を預かったと云われております。

★戦後、板橋区から練馬区が分かれました。仲仙道（中山道とも云う）が通り、地下鉄が造られる前は都電が走り、祝い事があると花電車が通りました。明々と電球を照らし花でかざった電車です。板橋は歴史のある町であります。

大澤　正雄（昭和二十二年卒）

今の中山道から金沢橋にかけては一面の原っぱでよく遊んだものです。入学の頃は板橋駅を西へ下ったところに住んでいました。途中に嶋田薬局（同窓会顧問をしている嶋田功さんの家）があり、私の家から先には牧場がありました。谷端川（私たちは大ドブと云っていました）から南、今、団地のあるところも一面の野原で夏なんかトンボとりで夕方まで走りまわっていました。戦争中その野原に軍？の食糧倉庫が出来て戦後焼け焦げた缶詰などを拾いに行きました。

戦争が終わり、昭和20年の秋、疎開から帰って来た時、板橋駅の屋根に大きな穴があいて、そこに月が輝いていたのを今でも覚えています。

あれから71年、板橋もずい分変わったようですが街並みには当時の面影があります。

21年の六年の時は、焼け跡整理を毎日やらされました。秋には木造の校舎が出来て木の香りがしたのを覚えています。

川井　忠行（昭和二十三年卒）

昭和21年3学期疎開先（群馬県利根郡新治村）から家族と板橋の家で合流し、板四小に転校した。

家は陸軍造兵廠の官舎で通学区域のはずれであったので、当時、学校の友達はいなかった。5年生になり、級分けがあり3組になった。私は2組で塚田先生が担任の男女組であった。松本恭介君、二上博之君が近所であることがわかり、自分達で作ったボール、バットで近くの空き地で野球の真似事をして遊んだ。一人では、竹馬を作り、上手く乗れると段数を増やし楽しんだ。

特に、松本君とは互いに家に行き来し、彼から蒸気機関車、電車、貨車の型式、特徴を教えて貰った。また、電車の設計図を基に1/45の模型をボール紙で作り、レールを施設、モーターで走らせ楽しんだ。

以上が板四小時代の良い思い出となっている。

大島　兌夫（昭和二十四年卒）

一、昭和18年4月入学、秋頃には空襲訓練で机の下にもぐる訓練。

二、一年生終わりに栃木県内㈠に疎開。３年４月に集団疎開（沼田叙林寺）したが、６月には体調不良で栃木県内㈡に疎開。２０年暮れに板橋に戻る。

三、当時の板橋は見渡す限りガレキ、残がい山積みし以前の街並みが一変！！風向きによっては板橋駅ホームで、大塚駅の構内放送が聞こえる程の惨状を実感した。

四、教科書は進駐軍の「お達し」により米軍の不都合箇所を黒塗りした（ほぼ半分位）。その後”新教科書”は新聞大の印刷物で配布され、ハサミ針糸などで各自工夫して製本したことを覚えている。

五、遊び道具は殆どなく盛んだったのは、なわ跳び、竹馬、メンコ、ビー玉、ベーゴマ、オハジキ、お手玉、タコ揚げ等々。

岩田　和子〈旧姓仙石〉（昭和二十七年卒）

敗戦後の21年入学の私達、ホントに何もない時代だった。テレビ、ゲームは無論、家電も何もなかった。それでも何故か楽しかった。男の子も女の子もつるんであっちこっちにある焼け野原で遊んだっけ。下板橋の石屋さんに潜り込んで宝物のような石をゲットしたり、ターザンごっこをしたり……。

夏休みの前のソワソワ感といったら！近所の子供達と子供会を作って、涼しい朝のうちに宿題をしたり、絵を描いたり…。そうそう、五年生の休みに

男の子と女の子数人で石神井公園に行ったっけ、板橋から乗継いで行くのは大層な冒険だった。子供なりに悩んだこともあったけど、思えばみんな遠い昔のこと、生き生きとしていたことは確かな気がする。

「小学校の想い出聞きたいの」「あの頃、校庭が上下になってたよね。上と下の校舎に渡り廊下があってさ、カタンカタンという音、今でも耳に残っているよ。」「雨が降るとすべったりして。」「こんなこと云っていいのかな。お前と給食当番の時、渡り廊下ですべってパンをばらばらにまいたろ、どうしようと思ったけどパンの汚れをパッパッと。」「そうそう、あとで先生に怒られた。」「怒られた？」「放課後両手に水の入ったバケツを持って立たされた。」「お前だけか？」「今だったら大変ネ、家の人に先生モンク云われるかも。」「うちらの先生体育じゃない、雪の日なんか授業やめて校庭で相撲とったんだよ男も女も。」一組の０君、Ｋ君、Ｙさん、二組のＴ君、三組の私、居酒屋で飲む前に取材みたいなことしました突然に。

涌井康之（昭和二十七年卒）

同級生Ｋ君は板谷公園のブランコ名人で、彼が漕ぎだすと、まるで一回転してしまうのではないかと思うくらいの高さまで揚がった。そのあまりの雄姿に魅せられて、仲間達は声すらだすことを忘れた。彼は、間違いなく板谷公園のヒーローだった。

あるとき、K君がブランコからまっ逆さまに落ちたと聞き、何だか私が落としてしまったように感じて胸が痛んだ。仲間の期待にこたえて、彼の漕ぎ方がどんどんエスカレートしてしまった結果そうなったのではないか、と思えたからだ。

噂を聞いてから幾日かした夕方、私がブランコをぼんやり眺めていると、頭を包帯でグルグル巻きにしたK君が、きまり悪そうに近づいてきた。

「……」

「……」

私は話し掛けようとしたが、どう言っていいかわからず、彼も何も言わずに、二人ブランコを見つめているだけだった。

小学校時代のこの出来事から半世紀以上も経った今、私は、板谷公園のブランコを揺らす。見渡す公園風景は当時と同じに映り、周りの常緑樹も、おそらく同じものに違いない。そういえば、木から木へと猿のように飛び移っていた少年がいたが、あれもK君だったのだろうか。

K君とは中学も同じだったが、クラスが違ったせいか、その時代の彼は記憶にない。だから、公園の白い包帯頭が、私の記憶にある最後のK君だ。

帰り際、公園入口に右から左に横書きで「東京市板谷公園、昭和十二年四月開園」と記してあるのが目にとまった。子供の頃は気がつかなかった、発見。

「K君どうしてんのかな」私は頭の中で呟きながら、板谷公園をあとにした。